

姫路城城下町跡

—姫路城跡第281次発掘調査報告書—



平成25年(2013年)3月

姫路市教育委員会

序

姫路城は、本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代の初期に池田輝政により現在の五重六階、地下一階の大天守そびえる姫路城が築かれ、その後400年間その歴史を刻み続けています。また、平成21年度以降5年をかけて大天守の保存修理工事を実施するとともに、見学施設である「天空の白鷺」で文化財の大切さを知っていただく機会を設け、姫路城を未来に引き継ぐための活動をおこなっております。

城を囲む城下町は、天守を中心に巡らされた三重の堀によって、中枢の置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分されており、内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として保護・顕彰が図られるとともに、外曲輪では姫路市の中心地として中核市にふさわしい街づくりがなされています。今回は外堀の外側、忍町において発掘調査を実施し、外堀に面した町屋の遺構が確認できました。ここにその成果を報告し、姫路城城下町跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に、事業実施にあたり多大なご協力を賜りました岩元興業株式会社、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成25年（2013年）3月
姫路市教育委員会
教育長 中杉隆夫

例言

1. 本書は、兵庫県姫路市忍町37-3、37-4に所在する姫路城城下町跡（遺跡番号：020169）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、岩元興業株式会社からの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。
3. 本発掘調査（調査番号：20120032）は、姫路市埋蔵文化財センター 黒田祐介が担当した。
4. 整理作業は、平成24年度に姫路市埋蔵文化財センターにて実施した。
5. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
6. 土層名は、『新版標準土色帳』（1999年度版）に準拠した。
7. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種は以下のように呼称した。
ピット→SP 土坑→SK
8. 焙烙は、中川2012の分類を踏襲した。
9. 本書の執筆・編集は、黒田がおこなった。
10. 本報告に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターに保管している。

1. 調査に至る経緯と調査・整理の体制

姫路市忍町37-3、37-4において、岩元興業株式会社による立体駐車場の建設工事が計画された。当該地は、姫路城城下町跡（遺跡番号：020169）に該当しているため、平成24年（2012年）3月24日に確認調査（調査番号：20110344）を実施した。調査区は、2×2mのものを1箇所、工事予定地の中央に設定した。その結果、近世の整地層および地山、さらに漆喰塗りの土坑1基を確認した。遺構が良好な状態で残されていることが判明したため、本調査を実施することとなった。調査期間は、平成24年（2012年）5月9日～5月17日である。

調査は岩元興業株式会社の委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。現地調査開始から整理事業終了までの調査体制は、以下のとおりである。

姫路市教育委員会

教 育 長 中杉隆夫

教育次長 林 尚秀

生涯学習部

部 長 小林直樹

文化財課

課 長 福永明彦

係 長 大谷輝彦（調整・事務）

埋蔵文化財センター

館 長 秋枝 芳

係 長 岸本幸男（庶務）

森 恒裕（事務）

技術主任 小柴治子

福井 優

中川 猛（調整・事務）

南 憲和

技 師 堀本裕二

主 事 補 嶋田 祐（庶務）

技 師 補 黒田祐介（調査・整理）

整理事業員 覚野郁子、香山玲子、清水聖子、田中章子、玉越綾子、寺本祐子、野村知子、

藤村由紀、三輪悠代

2. 姫路城城下町における調査地の位置

調査地にあたる姫路市忍町37-3、37-4は、姫路城大天守から南南東へ約1.2km、外堀の外側に位置する。近世において当該地は、北は姫路城外堀に面しており、東には飾磨門と飾磨津へ通じる飾磨街道を控えている。また、南は飾磨門から西へのびる街路に面しており、姫路城城下町とその外をつなぐ交通上重要な位置に立地していることがわかる。

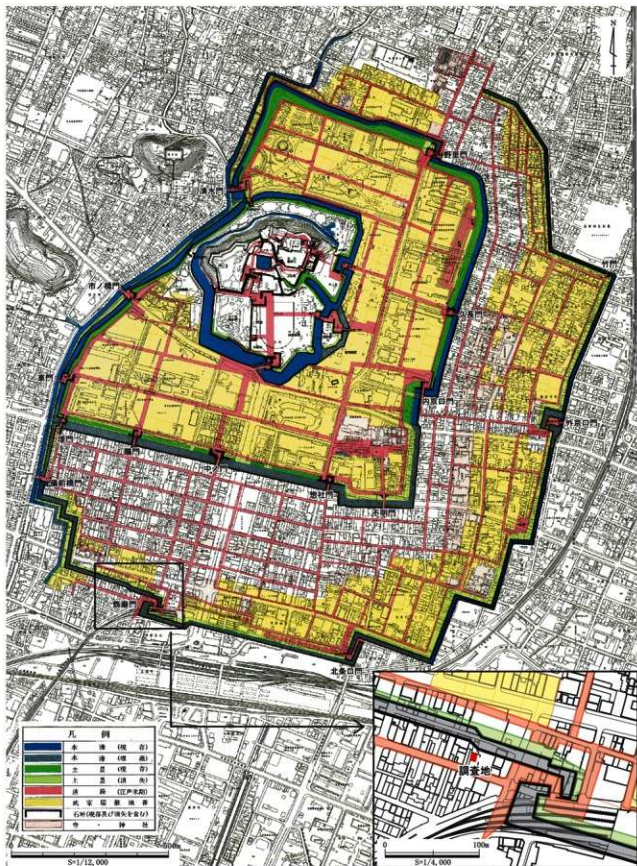


圖1 調查位置圖
 (總路市1986『總路城跡(城郭圖)』、一部改定・加筆)

3. 調査の成果

標高約10.4mで遺構検出をおこなったところ、土坑9基とピット2基を確認した。攪乱をほとんど受けておらず、遺構等の残存状態は良好であった。

基本層序は図3の通りである。3・4層は近世の整地層である。今回の調査ではこれらの整地層直下の5層上面で遺構を検出した。

SK1は、調査区北東角に位置する。北側半分は攪乱を受けていた。深さは約15cmである。1は蛇目高台をもつ青磁香炉、2は青磁染付碗である。焙烙にはE2類(3)、H類(4)がみられる。これらはおおよそ18世紀代という時期を与えることができる。

SK2は、SK1の直ぐ南に位置する。SK3を切る土坑で、直径約1.6mの円形を呈する。深さは約40cmである。ほぼ正円の平面形および土層断面から、掘方内に直径約1mの桶を据えていたものと思われる。1・2層からは多量の遺物が出土した。5は関西系焼締陶器播鉢、6は瓦質土器火鉢、7・8は丹波焼甕である。また軒丸瓦(9)は、巴文に3つの珠文がつく珍しいものである。遺物は18世紀後半以降のものを主体とする。

SK3は、SK2に切られる土坑である。本来の形状は不明で、短軸約1m、深さ約40cmを測る。遺物の出土はごく少量にとどまった。

SK4は、調査区南東隅に位置する土坑で、長軸約2m、短軸約1mを測る。底面で正円の凹みを検出したことから、SK2と同様に桶が据えられていたことがわかる。出土遺物としては、胎土目の唐津焼皿(10)、丹波焼播鉢(12)、信楽焼水注(14)、焙烙(13)が挙げられる。

SK5は、確認調査の際に見つかった漆喰塗りの土坑で、調査区のほぼ中央に位置する。直径約1.4m、深さ約0.6mを測る。また漆喰の厚みは、側面で約3cm、底面で約5~10cmを測る。丹波焼甕(15)、染付碗(16~18)、施釉陶器調理具(19・20)、焔炉(21)、焙烙等が出土した。焙烙にはD類・H類・瀬戸内系(22)がみられる。幕末期の遺物が主体をなす。

SK6は、調査区北西角に位置する。長軸2.7m、深さ約20cmを測る。埋土はSK1のもの(2層)と共通している。遺物は出土しなかった。

SK7は、調査区西隅に位置する。深さは約20cmである。既設構造物による攪乱により他の遺構との切り合い関係は不明である。少量の陶磁器に加え、硯(23)、叩き目の残る焙烙A類(24)も出土した。

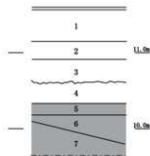
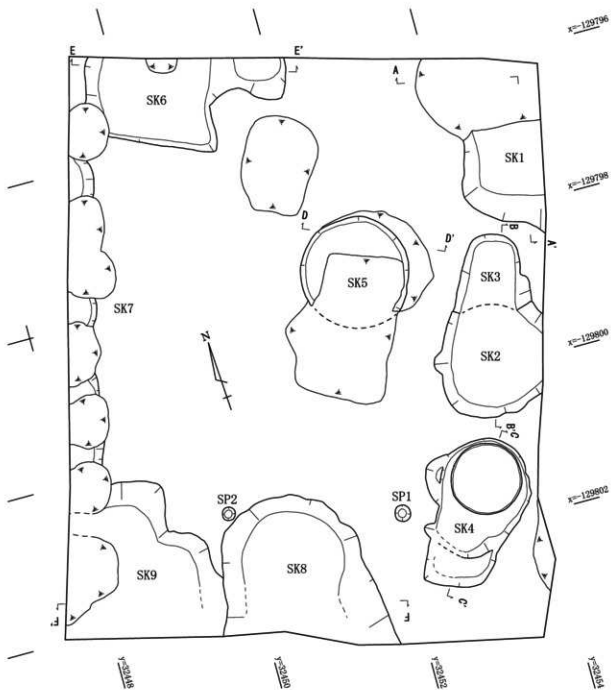
SK8は、調査区南隅に位置し、直径約2mを測る。最終的に検出面から2m以上掘り下げたものの、底を確認できなかった。埋土中には人頭大の円礫も含まれていることから、井戸である可能性が高い。遺物の出土はごく少量にとどまり、時期を特定しうる遺物はない。砥石片が1点出土した。

SK9は、調査区南西角に位置する、深さ約0.5mの不整形の土坑である。SK8に切られており、西側はH鋼による攪乱を受けているためSK7との切り合い関係は不明である。砂目痕のある唐津焼皿(25)、染付碗(26)、骨製筭(27)等が出土した。染付碗は、18世紀前半頃のものである。

SP1-SP2は、ともに直径約20cm、深さ約15cmを測る。埋土は共通しているものの、性格は不明である。

4. まとめ

今回、飾磨門外の町屋跡の調査をおこなった。その結果、土坑を中心とした複数の遺構を確認し、また胎土目や砂目痕のこる唐津焼皿といった17世紀に遡る遺物などが出土した。また、今回の調査では礎石等の建物に関する遺構が認められなかった。このことから、建物は街路面に面する南側にあり、調査箇所は建物の北側、裏庭部分に該当しているものと考えられる。

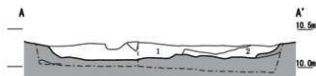


1. 造成土
2. 暗灰色 2.5Y5/2中砂
3. 黄灰色 2.5Y4/1細～中砂：近世堆積層
4. 灰黄色 2.5Y7/2極細砂：近世堆積層
5. 赤褐色 10YR5/1極細砂：地山
6. にぶく黄褐色 10YR6/2極細砂
7. 黄灰色 2.5Y5/1砂レキ



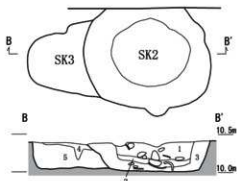
【上】図2 調査区平面図 (S=1/50)

【左】図3 基本層序 (S=1/50)



1. 暗灰黄色 2.5Y5/2シルト～細砂：しまり弱く、粘性やや弱い、10cm大の円礫、塊状境土を含む。
2. 黄灰色 2.5Y6/1粘土：しまり弱く、粘性強い、遺構境土。

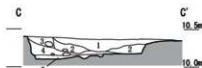
-1 SK1断面図



1. にぶい黄色 2.5Y6/3中砂：しまりやや弱く、粘性やや弱い、5～20cm大の円礫、瓦、陶磁器を含む、SK2縁内境土。
2. 黄灰色 2.5Y6/1中砂：しまりやや弱く、粘性やや弱い、20cm大の円礫、瓦、陶磁器を含む、SK2縁内境土。
3. 灰白色 2.5Y7/1細砂：しまりやや弱く、粘性やや弱い、SK2縁方境土。
4. 黄灰色 2.5Y6/1細砂：しまりやや弱く、粘性やや弱い、3cm大の円礫を含む。
5. 暗灰黄色 2.5Y5/2細砂：しまりやや弱く、粘性やや弱い、灰色・黄灰色砂ブロックを多く含む。

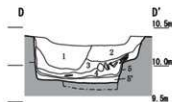
※平面図は検出状況を表す。

-2 SK2・SK3平・断面図



1. 褐灰色 10YR4/1極細砂：しまり弱く、粘性弱い。
2. 灰黄色 2.5Y6/2極細砂：しまり弱く、粘性やや弱い、10cm大の円礫を稀に含む。
3. 黄灰色 2.5Y6/1極細砂：しまり弱く、粘性やや弱い。
4. 黄灰色 2.5Y5/1細砂：しまり弱く、粘性やや弱い、10cm大の円礫を稀に含む。
5. 黄灰色 2.5Y4/1シルト～細砂：しまり弱く、粘性やや弱い、粘土痕跡内土。

-3 SK4断面図



1. 灰黄色 2.5Y6/2粗砂：しまり弱く、粘性弱い、5～10cm大の円礫を含む。
2. 黄灰色 2.5Y6/1中～粗砂：しまり弱く、粘性弱い、5cm大の円礫を稀に含む。
3. 黄灰色 2.5Y6/1細砂：しまり弱く、粘性弱い、10cm大の円礫を稀に含む。
4. 暗灰色 3X1/1シルト～しまり弱く、粘性強い、瓦片を含む。
5. 黄色 2.5Y8/8中～粗砂：しまり強く、粘性強い、漆喰。
- 5' にぶい黄色 2.5Y6/3極細砂：しまりやや弱く、粘性やや弱い、漆喰。

-4 SK5断面図



1. 黄灰色 2.5Y6/1粘土：SK1-2層と対応。

-5 SK6断面図



1. 褐灰色 10YR4/1砂レキ：しまり弱く、粘性弱い、5～20cm大の円礫を多く含む。
2. にぶい黄褐色 10YR5/3砂レキ：しまり弱く、粘性弱い、5cm大の円礫を含む。
3. 褐灰色 10YR5/1砂レキ：しまり弱く、粘性弱い、5～10cm大の円礫を多く含む。
4. 褐灰色 10YR6/1砂レキ：しまり弱く、粘性弱い、5cm大の円礫を多く含む。
5. 褐灰色 10YR4/1砂レキ：しまり弱く、粘性弱い。
6. 灰黄褐色 10Y5/2細砂：しまり弱く、粘性やや弱い、黄褐色細砂ブロックを含む、上面に散状境土。
7. 黄灰色 2.5Y5/1細砂：しまり弱く、粘性やや弱い。
8. 暗灰黄色 2.5Y5/2細砂：しまり弱く、粘性やや弱い。
9. 灰黄褐色 2.5Y6/2細砂：しまり弱く、粘性やや弱い。
10. 暗灰黄色 2.5Y5/2細砂：しまり弱く、粘性やや弱い。
11. 黄褐色 2.5Y5/3細砂：しまり弱く、粘性やや弱い。

-6 SK8・SK9断面図



図4 遺構平・断面図 (S=1/50)

出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土遺構/土層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
1	磁器	香炉	SK1/2層	11.7	6.9	7.7	青磁、蛇の目高台
2	磁器	碗	SK1/2層	11.8	4.5	6.35	外面青磁、内面染付
3	土師器	焙烙	SK1/2層	—	—	—	E2類
4	土師器	焙烙	SK1/2層	44.7	—	(5.8)	H類
5	陶器	播鉢	SK2/1・2層	39	16.6	28.1	関西系統縮陶器
6	瓦質土器	火鉢	SK2/1・2層	22	—	(17.8)	内面に2~3つの突起
7	陶器	甕	SK2/1・2層	—	—	—	丹波焼
8	陶器	甕	SK2/1・2層	—	16.3	(12.7)	丹波焼
9	瓦	軒丸瓦	SK2/1・2層	16.5	—	—	
10	陶器	皿	SK4	—	4.6	(1.3)	唐津焼、胎土目
11	磁器	皿	SK4	—	5.2	(1.8)	染付、墨弾き技法
12	陶器	播鉢	SK4	—	—	(3.6)	丹波焼、口縁端部は肥厚、 摺目は櫛目
13	土師器	焙烙	SK4	—	—	(5.5)	
14	陶器	水注	SK4	—	10.4	(2.2)	信楽焼
15	陶器	甕	SK5/1~4層	22.4	—	(20.2)	丹波焼
16	磁器	碗(鉢)	SK5/1~4層	16	7.6	7.9	染付
17	磁器	碗	SK5/1~4層	10.6	—	(4.6)	染付
18	磁器	碗	SK5/1~4層	8.6	3.6	5.1	染付
19	陶器	片口	SK5/1~4層	21	—	(8.7)	
20	陶器	把手付水注	SK5/1~4層	7.8	6	9.9	外面底部に墨書
21	土師器	焜炉	SK5/1~4層	—	18.2	(10.6)	外面底部に脚2ヶ所残存
22	土師器	焙烙	SK5/1~4層	16.8	—	(6.45)	瀬戸内系
23	石製品	硯	SK7	長さ(10.3)	幅5.1	—	
24	土師器	焙烙	SK7	—	—	—	A類
25	陶器	皿	SK9/7~11層	—	5.2	(2.4)	唐津焼、砂目
26	磁器	碗	SK9/7~11層	10	4.2	5.3	染付
27	骨製品	筭	SK9/7~11層	長さ(11.2)	—	—	穿孔は3箇所、貫通せず

()は残存値

【参考文献】

- 川口宏海1992「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の近世丹波焼製品」『植崎彰一先生古希記念論文集』植崎彰一先生古希記念論文集刊行会
- 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の福年—九州近世陶磁学界10周年記念—』
- 白神典之1990「堀播鉢と明石播鉢」『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会
- 中川 猛2012「焙烙考—姫路と周辺の焙烙について—」『山口大学考古学論集』（中村友博先生退任記念論文集）中村友博先生退任記念事業会